

大賞

赤いてぶくろ

遠山ようこ

もうすぐ春だというのに、雪がふりました。

ふくらみかけた花の蕾は、首をすくめてしまいました。こんなに雪がつもったのを、女の子ははじめてみました。風をさそって舞いあがる雪。それをおいかける雪。まるで雪が鬼ごっこをしてるみたいだ、と女の子は思いました。

雪がつもると遊びはたいいてい決ってしまいます。雪がっせん、スキー、かまくら。ここは市川というまちの中で、それに女の子はひとりぼっちでしたから、雪だるまを作ることにしました。

おじいちゃんにないしょですが、植木から葉っぱを一枚と赤い実をひとつしっけいして、目と口をつけました。いつか絵本で見た雪だるまには手があったことを、女の子は思い出しました。小枝をさがしてきてつけました。

小枝の先に赤いてぶくろをはめたのは、自分でもいい考えだと思いました。

次の日、雪はすっかりやんでいました。真新しい雪の上を歩いて、女の子は学校へ行きました。

きょうは五日ですから、最悪の日になりそうです。女の子の出席番号は五番でした。先生には、その日の日付で当てるクセがあるのです。一時間目は、こくごです。読むのが苦手なのは、漢字のせいなのです。どうしてもつかえてしまい、スラスラ読めません。ところが、きょうはどうしたのでしょうか。漢字のところにくると、耳もとで男の子の小さな声がして、スラスラ読めちゃうのです。

二時間目はさんすうでした。女の子はひき算が苦手です。

(7から9はひけないから、十の位からかりてきて・・・)

頭の中は混乱するばかりです。でも、その時も、男の子の小さな声が助けられました。不思議なことはまだつづきました。おんがくもオルガンとびったりあって歌えたり、たいくくでは、どうしてもとべなかったとび箱がとべてしまったのです。給食は一番ゆううつなのですが、ニンジンもピーマンものこしませんでした。

女の子が学校から帰るとき、屋根からも木の枝からも雪のしずくがひっきりなしに落ちてきました。少しドキドキして、女の子は庭にまわりました。やっぱり雪だるまはあとかたもありませんでした。女の子は庭にのこされた赤いてぶくろをひろいあげました。

「赤いてぶくろをありがとう」

耳もとで、そんな男の子の声をきいたような気がしました。